

## 令和3年度 学力向上プラン

学校名 中央区立月島第二小学校

## 学校の教育目標

心の豊かな子ども・よく考える子ども・たくましい子ども

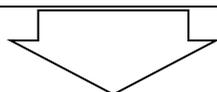
教育目標を達成するために学校として重点的に育成を目指す資質・能力（確かな学力向上にかかわる内容）

- ・基礎学力を確実に身に付けさせるとともに、一人一人の習熟度に応じて学力を伸ばす指導を行う。
- ・児童自ら課題を発見し、主体的に問題を解決する力を身に付けさせる。

令和2年度「学習力サポートテスト」や令和2年度学力向上プランの検証結果等の分析や、日常の学習の様子等から見られる課題及び要因

	児童・生徒の学力の課題	主な要因
国語	国語の書く能力については、6年生の学習力サポートテストが区の平均より6.0ポイント下回っている。5年生でも同様に、区の平均より9.1ポイント下回っている。今後、書く活動を多く取り入れる授業展開の工夫と、作文の基礎基本を抑えることが求められる。	普段から、自分の考えを文章に表す活動の回数が少ないこと、書き方のスキルが定着していない児童が多数いることが要因と考えられる。
算数	6年生で行った学習力サポートテストでは、どの領域においても中央区の平均を5.8～6.8ポイント下回っている。また、4・5年に関しては、サポートテストの結果が区の平均よりも3ポイント前後下回っている。学習にかける時間が減ったことが要因として挙げられる。	朝学習の時間が削減されたことや、放課後算数教室の時間が減ったことにより、算数の学習における時間が短くなったことが主な要因である。
社会	社会科ではどの学年も、「社会的な思考・判断・表現」の領域について区の平均より3.6～5.1ポイント下回っている。社会的な思考が身に付いてきているが、その思考を表現する機会が不足している。	授業の中で自分の考えを発表し、その発表について意見を交わし合うような機会が少ないことが要因として考えられる。
理科	6年生の学習力サポートテストでは、「自然事象についての関心・意欲・態度」の領域について区の平均よりも7.1ポイント下回っている。また、4年生の学習力サポートテストでは、「観察・実験の技能」の領域が、区の平均よりも10.1ポイントほど下回っている。	自然事象について、観察や実験を行う環境が少ないことがあげられる。また、実験の技能が低下していることや実験器具の使い方について復習していくことが課題である。
外国語	低学年は、単語数が多いため単語で話すことはできるが文章として話すことが難しい。中学年は、語彙の表現や定着に個人差がある。高学年は、コミュニケーションの能力の差が大きい。	学習する単語が定着していない。また、その単語を使ってコミュニケーションを取ることが難しい。
体育	本校の特色であるなわとび活動を取り入れていることで主体的に運動している。昨年度新型コロナウイルス感染症対策の中、なわとび運動により体力を維持できることがわかった。なわとび以外の運動を今後考えることが課題である。	なわとびを軸に、他の運動に関しても体育の授業に取り入れていくことが必要である。

学力向上に向けた視点	年度末までの目標及び指標
①学力基盤	学習内容を理解し、発達段階に応じた学習の資質・能力を身に付け、児童自らが主体的に学ぼうとする姿勢を全児童に身に付けさせる。
②授業改善	全教員が、言葉の学習や作文について、言語の知識・理解・技能の習得のために、個別指導の充実を図る。学習力サポートテストの国語において、区の平均に達するようにどの学年も3.0ポイントアップを目指す。
③教員の指導力	全教員がユニバーサルデザインの視点を意識して教材研究を行い、児童の90%が「楽しい」と思う授業づくりを目指す。
④家庭との連携	家庭学習の定着率を学年において、80%を目標とする。また、保護者の児童への働きかけを具体的に示し、生きる力を育む。
⑤体力向上	全児童に対して体力向上に向けた取り組みの充実を図る。児童の体力づくりにおける肯定的な自己評価をしている児童の割合を8%上げ、90%以上を目指す。



### 【目標達成のための具体的な取組内容】

①学力基盤	
取組Ⅰ	児童の実態に合った各教科の年間指導計画を作成し、計画的な指導をくり返し行い、学習の基礎・基本の確実な定着を図る。特に算数科の放課後算数教室に力を入れる。
取組Ⅱ	算数では、年間を通じて単元ごとにレディネステストを行い、コースガイダンスに基づいたクラス分けをすることで、児童の習熟度に合わせた指導を行う。
取組Ⅲ	放課後「さんすう塾」や夏季補習などを活用し、学習の定着に不安のある児童には、東京ベーシック・ドリル等を活用し、個別の指導を行う。

②授業改善	
取組Ⅰ	指導時間内に、どの児童も「分かった」「できた」ということを、実感できるような授業展開の工夫を行う。特に社会や理科の学習において自分の意見を発表する機会を意図的に取り入れる。
取組Ⅱ	各教科では、ユニバーサルデザインの視点に立ったどの児童にも分かりやすい授業展開を目指す。そのために、児童の反応を予測した教師の発問を吟味し、綿密な板書計画を立てる。

取組Ⅲ	自然事象について観察や実験を行う環境が少ないので、タブレットを活用して、観察や実験器具の使い方に関心を持たせ、児童の学習意欲向上を目指す。
-----	---

### ③教員の指導力

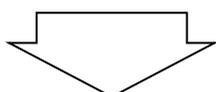
取組Ⅰ	校内研究授業では、ユニバーサルデザインの視点に立った授業づくりについて研究を深め、教員自らが楽しいと感じるような研究授業を目指す。
取組Ⅱ	若手教員の授業力向上のため、OJT研修を月に1回実施する。若手教員が行った授業について研究協議を行う。 主任教諭でグループを作り、一つのテーマに沿った研修会を行う。
取組Ⅲ	教員相互の授業力向上のため、研究授業の事前授業を公開とし、学校全体で、教員の授業力向上に尽力する。

### ④家庭との連携

取組Ⅰ	学校ホームページの学年のページを開設し、学年行事についての情報を迅速に公開できるようにする。また、学年で知らせたいことなどについて、安全安心メールを活用して伝えるようにする。
取組Ⅱ	個人面談・保護者会等で、児童の学習状況や努力の様子を伝えたり、個人の課題を伝えたりすることで、保護者と共通理解を図り、連携を強化していく。(保護者会をzoomで行っていく)
取組Ⅲ	学校だより、学年だより、学級通信等で学校での取組や学習内容等、家庭に対して、分かりやすい言葉を使って発信していく。また、タブレット端末を積極的に活用した連携を推進していく。

### ⑤体力向上

取組Ⅰ	体力調査の結果を分析し、児童の体力や運動能力を客観的に把握することで、課題となる運動能力の向上に向けた取り組みを推進し、運動が楽しいと感じられるような授業内容を計画する。
取組Ⅱ	体を動かす遊びやマイスクールスポーツに加え、基礎的体力・バランス力の向上を目指すコーディネーショントレーニングの要素を入れたなわとびの準備運動を授業に取り入れる。



## 【取組結果の検証】

学力向上に向けた視点	取組の成果	取組の課題及び解決策
①学力基盤		
②授業改善		
③教員の指導力		
④家庭との連携		
⑤体力向上		